

## 我流神話大全②「アムリタ・アヴァターラ」

○

先日、私は友人の吉野にとある冊子を渡された。コピー用紙をホッチキスでとめた簡素な物で、表紙には『基礎ヒンディー語』と書かれている。

「実家に帰った時に、ラジオ講座でヒンディー語をやっていた時のテキストを発見したんだ。結構面白かった記憶があるから、一緒にやろうぜ！」

手作り感満載だと思ったら、吉野がわざわざコピーして綴じたものだったようだ。英語ならともかく、ラジオ講座にヒンディー語があったとは初耳だが、中身を確認してみるとなかなか面白そうである。

「だろ？ちゃんと第一回から全部録音してあるから発音もばっちりだ！」

そうして、一か月のヒンディー語講座が始まった。

吉野は「面白ければええじゃないか」をモットーとし、猪突猛進を体現したような男である。以前奴が「竹」に並々ならぬ愛情を注いでいた頃、その性格のせいでおぞましい厄介事を引き起こしたことがある。しかも私は盛大に巻き込まれてしまった（文化祭号参照）。それ以降は特に趣味も無く落ち着いていたが、久しぶりに夢中になれることが現れたのだろうか、これは。

毎日十五分ほど、ひたすら声に出し書くというのを一カ月も続ければ、なるほど日常会話程度のヒンディー語は身についたような感じがした。驚いたのは吉野である。「昔取った杵柄」とでもいうのだろうか。講座を少し聞くとあつという間に思い出し、流れるように異国の言語を話し始めたのだ。

「俺、結構まじめにやっていたみたいだ。ああ、インドに行きたいな」

どうやら奴の現在のマイブームはインドらしい。そういえば部屋にゾウの置物やペイズリ一柄の布が増えたような気がする。

「インド神の絵が欲しいんだよ。みんな面白い姿をしているし」

「民芸品店で、そういう物を売っている所があるはずだから、インドに行って訳のわからないものを盗ってくるのはやめろよ」

自分を満足させるためなら平気でそういうことをする男なのだ。吉

野は「しないさー」と手をヒラヒラとふった。

○

しばらくして、吉野が畳まれた一枚の紙を手に私を訪ねてきた。結構大きな古い紙で、端の方は破れていたり丸くなっていたりする。

「なんだそれ」

と問うと、奴はむふふ、と怪しい笑みを浮かべながらその紙を広げた。それは一枚の絵で、一つの山を中心に渦巻く海と、たくさんの神々が描かれていた。

『乳海攪拌（にゅうかいかくはん）図』だよ。『リグ・ヴェーダ』というインド神話の、天

地創造にあたる場面で神々と魔神が大海をかき混ぜてアムリタという不死の薬を取り出す、  
というものだ。大学の考古学研究室に遊びに行った時にもらった」

吉野は機嫌良く言った。

「よかったじゃないか、絵が手に入って。レプリカだろうが満足したか？」

「うん、実はこれ本物なんだ」

一瞬時が止まった。私はそっと吉野の手を絵からはがした。

「…なぜ本物を、お前が持っているんだ」

「最初は土産物屋で買ったとかいうレプリカをくれたんだけど、机の上に本物が置いてあったから入れ替えた。結構管理がずさんだね」

私は強烈なデジャヴに襲われた。こんなやり取りが前にもあった。

そして決まってそこから大問題に発展するのだ。

「お前はいつまでたっても学習しないな…」

吉野は私の独り言は気にもとめず、目を輝かせて絵を眺めている。

「ああ攪拌を現実に見てみたい！そしてアムリタが欲しい！」

ふざけるのも大概にしてほしいと思う。だいたい、これは考古学的に重要なものだったりするのではないだろうか。そこのところを吉野はどう考えているのだろうか。

「大丈夫だって。『乳海攪拌』なんて有名だから、古代にもいっぱいレプリカが作られただろうさ。これだって本家本元じゃないだろうし」

私はため息をついた。これ以上何を言っても無駄なことは分かるが、延々と説教したい気分だ。頭を抱えていた私は、だんだんとあたりが煙ってきたことにすぐには気付かなかった。

吉野は、絵に夢中であった。

○

気付けば煙はすっかり辺りを包みこみ、自分の手さえも見えなくなっていた。火事かと慌てたが、全く息苦しくない。しかも、なんだか花のような濃い香りがする。

「お香か？」

吉野に焚いたのかと尋ねるが、そんなことはないという。

「お前が本物を持って帰ってきたから、おかしいことが起こっているんだぞ」

「いいがかりだって。それにしてもいつ晴れるのかなあ」

そんな言い合いをしているうちに、煙はだんだんと晴れていく。しかし、私たちの目の前に現れたのは、私の住む四畳半ではなかった。

「ここは、どこなんだ…」

そこは完全に外であった。私たちは白い大理石の上に立っている。柱と屋根があり、結構広い。神殿のようなものではないかとあたりをつけた。花のような香りはまだ漂っていて、蒸し暑い風と溶け合いながら流れて行く。遠くに海が見える。私たちは突然の出来事に何も言えずにいた。突然、後ろで声がしたのでとっさに振り向く。

ペイズリー模様を所々にあしらった光沢のある長袖のチュニックらしきものと、もっさりとしたズボン姿の少女が立っていた。

「まさか、本当に現れるなんて！」

それを聞いた瞬間、私はここがどこであるのかを理解した。日本語ではない、英語でもない、それでいて聞いた瞬間日本語に変換できる言語といえば

「おい、これヒンディー語じゃないか？」

吉野の言葉に私は頷いた。間違いない、ここはインドだ。なんてこった。

「あの、すみません」

少女は怪訝そうに私たちを見た。私は吉野に目配せをする。奴の方がヒンディー語の能力は上だ。

「やあお嬢さん！ どうしたんですか？」

少女は安堵の表情を浮かべ

「神様、助けてほしいことがあります」

と言った。

—神様？

「私は第一王女のヴィマラといます。困ったこ…」

「王女？ あなたは王族なのですか？」

「はい、この王国の、次期女王となります」

現在のインドは王ではなく首相が国を治めている。しかし彼女の言うことを聞いているとどうも王（女王）が統治しているように感じられた。それはずいぶん昔のことだと私は認識しているが。

「今、何年ですか？」

典型的な質問に、ヴィマラは答えた。しかし私たちの知っている年号を口にできなかったばかりか、西暦を知らなかった。私たちは最終的に、場所だけでなく時間までも飛び越えて古代のインドに来てしまったという結論を出した。吉野はヴィマラに話の続きを促した。

「…困ったことというのは、マヘシュという僧侶なのです。彼はこの国で一番強力な力を持っているのですが、その、少し凡人と思考がずれていて、よく突飛なことをするのです。まあ、今まではかろうじて実害はありませんでした。しかし、今回ばかりはそうもいかなさそうなのです」

彼女の話がある程度まとめると、マヘシュは最近、海に浮かぶとある島に渡った。その頃から海の様子がおかしい。島を中心にゆっくりと海水が回転しているのだ。些細な変化なので、ヴィマラも漁師に聞いて初めて知ったらしい。マヘシュが企んでいることは定かではないが、回転が徐々に速くなっているというので、このままでは津波が起きて国全体が被害をこうむることになりそうだ。そこで神に助けをもらうために祈っていた、ということである。

「なるほど、だから神様と言われたのか」

ヴィマラも、私たちが現れてさぞ驚いただろう。

「なあ、どうする？ 私たちは神ではないから、そのマヘシュとやらが魔法でも使うのであれば太刀打ちできないぞ」

吉野にひそひそと言うと、奴は異物を見るような目で私を見た。

「何を言っているんだ！ 彼女は必死の思いで私たちに助けを求めている。神ではないから、相手が魔法を使うかもしれないからと、彼女、ひいては国民全員の希望を失わせることが許されるとでも思っているのかね！」

なんだか大袈裟だが、吉野にしては筋の通ったことを言っている。私は己のことばかり考えた自分を思わず恥じた。吉野はそんな私

を見て満足そうに頷くと、ヴィマラに向きなおった。

「分かりました。何とかしましょう。さっそくその島に行ってきます！」

「本当ですか！ ありがとうございます！」

ヴィマラは心底うれしそうに礼を言った。

海水が回転してるというのを、私は船の上で嫌というほど体験した。どんどん横に流されていく船を無理やりまっすぐ進ませているため、盛大に揺れるのだ。あつというまに私は船酔いをした。吉野は乗り物全般に強いため「揺れてるねえ」などと呑気に言っていた。

島に上陸した。そびえたつ山をドーナツ状の土地が囲んでいる、という地形だ。

「で、どこにマヘシュがいるんだ」

「見てみる、あそこ」

私は山の上で動く小さい影を指差した。長い杖のようなものを持って何かしている。正直、上まで登るのはかなりきつい。歩いて登れば何日もかかってしまうだろう。

「なにかないのか、エレベーターみたいなものは」

吉野はあちこち走りまわって探していたが、見つからなかったらしくぶつぶつと文句を垂れた。このまま悩んでいたら日が暮れてしまう。

その時、山頂からなにかが近付いてきた。どうやらマヘシュが持っていた杖が伸びてきたらしい。杖は私たちの上を通って海に突きささると、ゆっくり海岸線にそって移動し始めた。海水をかき混ぜているようだ。

「ちょっと待て…これ、『乳海攪拌』に似ていないか？」

吉野がつぶやいた。確かに、やっていることはほぼそれだ。そんなことを言っている間に、杖が一周して戻ってくる。

「そうだ、とび乗れ！」

私たちは杖が近くに来た時、しがみついた。杖はもう一周したあと、ゆっくり海から山頂へ、マヘシュのもとへと縮んでいった。

マヘシュは杖に私たちが付いてきたことに特に驚いた様子は見せなかった。

「君たちは、この国の者でも、この時代のものでもないな」

「そうですね。あなたは一体何をやっているのですか？」

マヘシュはからからと笑った。

「単刀直入だな、気に入った。教えてやろう。わしは不死の薬アマリタを手に入れるため攪拌を起こそうとしているのだ」

その答えに、吉野は身を乗り出した。

「しかし、アマリタは大昔に神々が取り出して、飲んでしまったのではありませんか？」

「わしも初めはそう思っていた。しかし長年書物を読んで学んだ末、わしは人工的にアマリタを作る方法を発見したのだ。いいか、アマリタの元となるものを作ったら、途中で海底に寝かせておく。そして攪拌を行うと、完全なアマリタを取り出すことができるようなのだ」マヘシュは自慢げに言った。

「大変だぞ吉野。すぐにヴィマラに知らせないと」

急いで下山しようとして、杖は今マヘシュの手の中にあるということに気づいた。知らせに行くと言ってしまったため、用心して杖をおろさないかもしれない。私は少し後悔した。しかし、マヘシュは微笑んで杖を伸ばし、下におろした。

「どうぞ、降りて知らせに行くといい。そうしたところで、私を止めることはできないからな」

とんでもない自信の持ち主のようだ。だが私たちにはヴィマラと国民たちのためにできる限りのことをする義務がある。

「吉野、行くぞ！」

「…いや、俺はここに残る」

私は思わず耳を疑った。マヘシュも少し驚きの色を浮かべている。

「何のつもりだよ」

「すまん。俺は、攪拌を見たい。そしてアマリタを見たい！好奇心が勝ってしまったようだ。だから、ここに残らせてもらおう」

「お前…島に来る前に私に言ったことはなんだったんだ！全部自分の好奇心で動いていたんだな！もういい、私は行く！」

私は怒りの収まらないまま下に降り、ヴィマラのところへ報告に向かった。

「アマリタ、そして攪拌…ですか。それはとても困ったことになります」

この海は、生きたり死んだり、つまり水で満ちている時と全くない時を繰り返しているらしい。攪拌を行うのは海が生きている時だ

が、莫大なエネルギーを使うため干上がってしまうかもしれず、そうなると一時的な大津波と、その後の水不足により、王国は壊滅的な状態になってしまう恐れがあるということだ。しかもマヘシュがアマリタを飲み不死身になった場合、更に悪いことを起こす可能性はとても高い。

「吉野もあちら側についてしまったし、何か対処法はないのだろうか…」

もともと、吉野はたいした敵にはならないだろうが。大事なところ

で失敗するのは目に見えている。

「…！ヴィマラ、いい考えが浮かびました。うまくいけば、アムリタを処理し、水不足は避けることが可能です。しかし津波は避けられないと思うので、今すぐ国民全員を高い山の上に避難させて下さい」

ヴィマラは頷いて指示に向かった。私はもう一度、島へ向かう。

すでに攪拌は始まりかけていた。ごうごうと流れる水に耐え必死で島に上陸すると、私は動きの速くなっている杖にしがみつき、初めと同じように山頂に向かった。

ゴゴゴゴ…

大きな地響きがして、海の一部が丸く開いた。その瞬間、いちばん外側の水が遠心力から解放され、王国の方へ流れていく。もう避難が済んでいるとよいが。

「よし、アムリタを引き上げるぞ」

マヘシュは杖とは別の、釣りざおのようなものを取り出すと、穴に向けておろした。私は杖から見つからないように草むらに隠れた。マヘシュはしばらく停止していたが、ある瞬間高速で糸を巻き、白い壺を引き上げた。中に入っているのがアムリタなのだろう。

「あの、俺が持っておきます！」

予想通り、吉野が進み出た。実際は、言った瞬間に壺を奪い取った。

「貴様、何をする、返せ！」

マヘシュが伸ばした手が空をつかむ。吉野は十分に距離をとり、瓶のふたを開けた。その瞬間私は草むらから飛びだした。

「吉野っ！」

「うわっ、びっくりしたっ！」

吉野はバランスを崩し、壺を投げ出した。それはそのまま海の中に吸い込まれていく。

「くっ！わしの苦労が！」

マヘシュは壺を追って飛び、共に海の中に吸い込まれていく。これは予想しておらず、驚いた。

不死身の薬を吸収した海は、一旦水がすべて消えたが、すぐにまた現れ始め、またたくまに元の大海原へと再生した。おそらく、もう海は死なないだろう。

「もったいない…アムリタが…」

吉野が悲壮な顔で海を見つめた。

「あきらめろ。だいたい不死身になったって面白いことが起こるわけでもない。むしろ、とんでもなくつまらなくなるだろうさ」

「そうかなあ…」

納得できない様子の吉野の前を、ゆっくりと風が流れていった。

○

国民は、ヴィマラの迅速な指示によって一人の負傷者も出さず避難していた。

「国を救っていただき、ありがとうございました。これから立て直していきます」

「いやあ、それほどでもないですよ」

これは私ではない、吉野だ。なんて虫のいい男なのだろう。ヴィマラは呆れた顔で笑った。

帰りは生きと同じように煙に包まれて帰った。部屋に戻ってきて、私は吉野に『乳海攪拌図』を返しに行かせた。奴が持ってきたものは、何かしらおかしなことを引き起こしてしまう。今後の私の身の安全のためにも、そこところは徹底しておかなければならないだろう。『乳海攪拌図』のレプリカは、今は吉野の部屋の壁にかかっている。